

研究論文

## カミングアウトをめぐる可変的な交渉過程／ ある障害をもつ男性同性愛者の経験を事例に

欧陽珊瑚

### 要旨

本稿は、障害のある同性愛者が家族に自分のセクシュアリティを伝えていく過程において、いかに障害者というマイノリティ性が働くのかを明らかにする。先行研究において、障害とセクシュアル・マイノリティというマイノリティの重なりから、当事者は「複合的不利益」とカミングアウトにおける多重な困難を経験すると議論されてきたが、その過程についての事例検討は不十分である。本稿は、華人同志の研究におけるカミングアウトの分析のなかで検討されてきた「カミングアウト・モデル」「カミングホーム・モデル」「カミングウィズ・モデル」という、規範に対する抵抗や調整を行う視角から、同性愛者かつ肢体障害者でもある台湾在住の男性の経験を考察する。

その結果、男性同性愛者かつ障害者という「複合的不利益」な立場は、カミングアウトの際の家族関係に対して必ずしも消極的に作用するわけではなく、むしろ障害者というマイノリティ性は、同性愛を拒絶する家族規範と交渉する資源になり、家族関係をポジティブに変容させることにつながっていたことが明らかになった。同性愛者による家族との関係の調整に関して、柔軟に三つのモデルの切り替えや統合を行うカミングアウトの過程には、複数のマイノリティ性を利用したより複雑な調整の在り方が見られる。多様な「カミングアウト」のあり方を、特定のモデルへと回収せず、個々の当事者が抱える複雑さとそれに伴う家族関係の変化に照らして検討していくことが重要である。

### キーワード：

障害者、華人同志、カミングアウト、家族関係、LGBT

## 1 はじめに

「カミングアウト (coming out)」という言葉は、同性愛者を含む性的少数者にとって、自分のセクシュアリティを他者に伝える行為を指している (Altman, 2010)。それは、英語圏のスラングで「クローゼットから出てくる (coming out of the closet)」と表現されてきたように (河口, 2003)、不可視化された非異性愛者の存在を可視化する行為でもある (Ryoji & 砂川, 2007)。従来の研究では、カミングアウトを定位家族 (自分が生まれ育った家族) に対して行う場合、異性愛規範による抑圧が同性愛者とその家族との間に葛藤を生み出すことが指摘されてきた (簡, 2012; 三部, 2014; Motoyama, 2015)。多くの議論は近代家族制度の抑圧面に焦点を当てており、セクシュアリティを中心に検討してきた。しかし、性別、人種、宗教、障害など複数のカテゴリが交差し合うことで生み出される「生」の複雑さの議論は不十分である。

障害者であり、同性愛と自認する人々のカミングアウト問題に関する研究はいまだ少ないが、わずかにある調査では、障害のある同性愛者ならではの困難が指摘されてきた。たとえば、Tom Shakespeare は、障害のある同性愛者は施設や家族からの介護に依存しており、カムアウトするとケアを受けられなくなる危険性があると指摘する (Shakespeare, 1999, p.46)。また障害者であり、かつ性的少数者であるという、同時に複数の社会的マイノリティに属する人々は、複数の差別 (multiple discriminations) を受けやすいともされる (Shakespeare et al., 1996)。そのような事態は、「複合的不利益」 (compounded disadvantage) と呼ばれている (Molloy et al., 2003)。ただし、障害のある同性愛者を対象にした従来研究は欧米が中心であり (cf. Leonard & Mann, 2018)、欧米以外の地域の研究は十分に展開していない。

そこで本稿では、華人同志における「カミングアウト」の実践モデルの可能性に依拠し、台湾の肢体障害をもつ男性同性愛者のライフ・ヒストリーを通じて、障害者であることがどのように「カミングアウト」の困難さやその実現過程に影響しているのかを考察することを目的とする。

## 2 先行研究と問題の所在

本節ではまず「華人同志」という用語について説明しておきたい。1990年代

前後から、中国語圏において、「同志 (tongzhi)」という言葉は同性愛者という意味ももつようになり、現在では広義の意味での性的マイノリティを意味する言葉として使用されている (cf. 三須, 2018)。人類学者である周華山は欧米 (Anglo-American) のゲイ・レズビアン解放運動の経緯や戦略をそのまま再生産することではなく、地域固有的な同志 (indigenous tongzhi) のポリティクスを構築する必要があると主張し、中国、香港、台湾の同性愛者の経験から同志の多様の、特有的な戦略を論じた (Chou, 2000)。周の影響を受けた学者たちは、伝統的な中国文化に影響されている地域社会であり、中国、香港、台湾や東南アジアの中国語圏で居住する “Chinese tongzhi” (本稿では「華人同志」と訳す) の経験を中心に考察を行っている (cf. Liu & Ding, 2005; Kong, 2011; Tan, 2011; 李, 2018; Huang & Brouwer, 2018)。

次に、これら華人同志を対象とする研究で提示されたカミングアウトに関する3種類の実践モデル、「カミングアウト・モデル (coming-out model)」、「カミングホーム・モデル (coming-home model)」、「カミングウィズ・モデル (coming-with model)」を整理したうえで、本稿の視座を提示する。

## 2-1 「カミングアウト・モデル」の困難さ

華人同志の研究では、性的アイデンティティの可視化というカミングアウトをめぐるポリティクスは、アメリカのレズビアン・ゲイ解放運動の影響を受けた社会運動の場面で強調されてきた。こうしたカミングアウトを通じた異性愛規範に対する批判や抵抗は、現在において性的な自由や平等を求めて闘う華人同志の運動主体の新たな原動力になっているが、社会運動の文脈でのカミングアウトの実践は日常生活でのカミングアウトの実践とは必ずしも一致しないと指摘されてきた (Huang & Brouwer, 2018, pp.100-101)。実際、華人同志の日常生活では、他者にセクシュアリティの表明、または「同志 (同性愛者)」としてカムアウトすることは、欧米型の「カミングアウト・モデル」と呼ばれている (Chou, 2000)。華人同志の実践では欧米型の「カミングアウト・モデル」をそのまま受容しているのではなく、「素地」(素質) や「道作り」(鋪路) のような華人圏の文化的概念を含む要因が介在している (Huang & Brouwer, 2018, p.102)。

ここで言及されている「素地」と「道作り」という比喩的表現は、「良い同性

愛者」の性質とみなされる高い経済力と社会的地位を得るための道筋を意味する。伝統的な中国文化に影響されている地域では、「孝」や「和」という規範が重視されている。「孝」とは主に一族に男子の後継者を産むことを意味し、「和」とは対人関係の調和と互いの「面子」を維持することを指す。一族の後継者を産まなくても「孝」を果たしていると承認されるためには、経済的に貢献する必要があり、既存の社会規範から逸脱しても「和」が達成されるためには、「あの人の人なら仕方がない」という特別な社会的地位を得る必要がある。そのため、当事者の間ではまず経済的成功を収めて「素地」をつくり、次に社会において優秀な人物になることでカミングアウトの受容を容易にするという「道作り」が企図される場合が多いのである。

「素地」と「道作り」に基づくカミングアウトには、既存の異性愛規範に挑戦するものではなく、特別な貢献や地位に応じた同性愛者への認識や受容を期待するものであり、「異性愛規範との共謀によって、ある種の同性愛規範が作りだされている」と批判されている (Huang & Brouwer, 2018, p.103)。つまり、欧米の社会運動の文脈では異性愛規範への抵抗を目指すプロセスの出発点となる「カミングアウト・モデル」が、「『良い』／『悪い』セクシュアル・シティズン (sexual citizen) を判断するためのモデル」(Kong, 2011, p.106) としてヘゲモニーへの依存とその再生産をもたらししていると示唆されているのである。実際に、華人社会では、こうした道作りをせずに、非異性愛的な欲望を表明することは、「孝」と「和」に対立すること、すなわち「離家 (out of home)」と位置づけられる。たとえば、親に同性愛であることをカムアウトした後に、家から追い出された事例はよく見られる (UNDP, 2016)。そのため、数多くの華人同志が「素地」がある／ないや、「道作り」ができる／できない状況に従って、カムアウトする／しないという選択に閉じ込められているとされる。

## 2-2 「カミングホーム・モデル」の限界

こうした状況を踏まえて、周は欧米の経験を普遍化した「カミングアウト・モデル」をそのままアジア地域に当てはめることはできないと指摘した (Chou, 2000)。彼は、中国、日本、タイ、インドなどアジア諸国には、欧米のようにセクシュリティを個人の権利として認める「空間」がなく、「本当の自分」を構築

するために自分のセクシュアリティを言語化するという文化的伝統がない状況であると述べる。そして、アジア諸国の当事者には、家族や文化的アイデンティティを否定するのではなく、家族規範や文化的文脈にセクシュアリティの問題を統合することで自分の声を取り戻すことができるようなカテゴリーや戦略が必要とされると指摘する (Chou, 2000, pp.252-259)。華人同志の経験を踏まえ、欧米型の「カミングアウト・モデル」に代わって周がその有効性を主張するのが、「カミングホーム (coming home)」という「地域固有モデル (indigenous model)」である (Chou, 2000, p.36)。

このモデルの基盤となる発想は、「帰家 (come home)」という華人文化における重要な伝統である。「帰家」とは、重要な祝日や記念日の際には実家に帰らなければいけない、という華人家庭の子どもに課せられた義務を意味する。一般的には、春節に子供が実家に帰ってきて、家族全員と一緒に食事するといったことである。だが同志にとって「帰家」という言葉は、家族と親密な関係を保ち、非異性愛的な欲望を抑制することで「孝」と「和」を維持するという期待や義務を伝えるものでもある (Huang & Brouwer, 2018, pp.97-98)。台湾の研究では、周が提示したカミングホームの実践は、次の3つの原則から成り立っているとされると指摘されている。

- (1) 非対抗的な関係：家族との良好な関係を維持した上で、ゆっくりパートナーを紹介すること、
- (2) 非宣言的な日常行動：パートナーを家族のような存在にして、家族の信頼と安心を勝ち取ること、
- (3) セックス (セクシュアリティ) を中心としない健全な人格：健康で幸せな生活を送ることが、親が子供は結婚しなくても良い人生を送れると実感できること、である。(Liu & Ding, 2005)

この原則に従った方法として、シンガポールの華人社会を調査対象とした研究は、家族にカムアウトすることで親子関係に緊張をもたらすことを回避するために、同性パートナーを友人として家族に紹介し、家族が友情以上の親密な関係を自然に受け入れてくれるのを待つという同志の事例を取り上げた (Tan, 2011)。

このモデルでは、同志と家族の間で、たとえ同性愛に薄々気づいていてもそれ

に言明せず、あくまで既存の家族規範のなかでふるまい続けるという「暗黙の了解 (silent tolerance)」を育む操作が必要となる (Liu & Ding, 2005)。しかし、家族が頑固な態度で「暗黙の」コミュニケーションすら拒否する場合、カミングホームの実践は行き詰ることになる。

### 2-3 「カミングウィズ・モデル」の不足

Huang & Brouwer は「カミングアウト・モデル」を実践できず、「カミングホーム・モデル」によるコミュニケーションにも失敗した同志のインタビューから、新たな実践モデルが発見した。これは、ゲイ男性とレズビアン女性が形式的に結婚する「形婚」(偽装結婚)で、互いの同性パートナーとの関係を維持し、親を安心させ、家族との「和」の関係も維持することが可能になる実践である (Huang & Brouwer, 2018)。たとえば、Zien というゲイ男性のケースでは、両親は長い間、彼のセクシュアリティに気づきつつも「ビジネスパートナー」として紹介された彼のボーイフレンドに難色を示し続けてきた。しかし、Zien がレズビアン女性と婚約すると、両親は態度を軟化させ、ときには Zien のボーイフレンドに対して息子同然に接するという変化が起きた (Huang & Brouwer, 2018, pp.107-115)。同性愛者が、偽装的な異性結婚をすると、同性間の関係 (same-sex relationship) が家族から暗黙的にも容認されることは、華人同志にとって既存の家庭制度内で非異性愛的な欲望を表明・維持する有効な戦略となる。彼らはこの戦略を「カミングアウト・モデル」と「カミングホーム・モデル」にあてはまらない、すべての実践を第三の選択としての、「カミングウィズ・モデル (coming-with model)」と名づけた。彼らが言う「カミングウィズ・モデル」とは非異性愛的な欲望を表明し、かつ何らかの方法で異性愛規範や家族規範などの既存の規範との両立を図る実践であるといえる。しかし彼らは、「形婚」以外の「カミングウィズ・モデル」の実践の可能性もありえると同主張したが、具体的な事例を論じておらず、このモデルの可能性に関しては検討する余地がある。

### 2-4 問題の所在

以上、華人同志のカミングアウトに関して先行研究が提示したモデルを整理してきた。個人と家族が緊密に繋がる東アジアの文化的文脈では、「カミングアウト

ト・モデル」は、「家庭崩壊」の危機（元山, 2014）を招きやすく、カミングアウト後の華人同志は、相手の理解や承認に左右される（李, 2018）という受動的な立場に置かれる。華人社会においてカミングアウトは「離家（out of home）」、すなわち「家族関係からの離脱／排斥」をも意味する。それに対して、「カミングホーム・モデル」は「帰家」、外で働く息子が家に戻るように、外の世界のもの（ここでは非異性愛的な欲望や同性間の関係性）とともに家族の元に帰り、家族関係のなかにそれらを溶け込ませることを目指す実践である。このモデルでは、華人文化の家族関係を維持することができるが、その成否は同志と家族間の不安定な暗黙の交渉に左右され、家族内での非異性愛的な欲望は抑圧される。「カミングウィズ・モデル」は「カミングアウト・モデル」と「カミングホーム・モデル」の実現が困難である場合の第三の選択として示唆されたもので、「カミングアウト」と「家族規範」の“併存”（with）を何らかの手段で目指すものだと想定されるが、その多様な手段および実際の内実はいまだ不明瞭である。

本研究は、以上のような先行研究が提示したモデルを「障害をもつ華人同志」の実践に照らしてみた場合、それはどのような形態や可能性として立ち現れるか、それは時間的経過や個人の心情的変化においていかに変化しうるかを析出し、複数のマイノリティ性を抱える当事者の実践を明らかにする。障害者のセクシュアリティ問題はいまだ十分に重視されておらず、障害のある華人同志の存在自体が社会的に不可視化されている。この状況では、どのような実践をしている当事者が典型的であり、それはどれほど有効かといった先行研究のモデルを仮説として検証する量的調査は困難である。

加えて、特定の文化的な文脈において何が合理的、妥当であるかを固定的に捉える視座に立つと、たとえば、障害とセクシュアル・マイノリティという二重のマイノリティ性があるなど、異なる属性をもち、異なる岐路を歩んでいる個々の実践がもつ可能性が見落とされてしまう。また個々の実践では、特定のモデルが排他的に選択されるわけではなく、その失敗や成功の上に別のモデルが選択されたり、いくつかのモデルが複合的に試されたりすることもあるだろう。しかし、そうした特定のモデルが選択されたり、別のモデルに移行したり、複合的に発動する個々の契機として何があり、どのような葛藤や心情的変化が生じているのか、その際に他のマイノリティ性や個人としての背景がどのように影響するの



は、これまで十分に検討されていない。

そのため本稿ではライフ・ヒストリー法を用いて、障害のある華人同志一人の人生においてこれらのモデルがどのように選択され・変容していくのか、その契機に何があり、それらにカミングアウトの主体が障害者であるといった個人の属性や経験がいかに作用しているかを考察する。

### 3 調査概要

本研究では、台湾の男性同性愛者と自認する肢体障害者である Vincent<sup>1</sup> のライフ・ヒストリーを分析する。インタビューは2019年2月に台湾で Vincent に個人の生活史、団体活動の経緯、社会運動の経験について、合計7時間を中国語で実施した。なお、本調査は立命館大学における人を対象とする研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

Vincent は、1960年代にラオスの裕福な華人家庭に、6人兄弟の長男として生まれた。子供のときに急性灰白髄炎（ポリオ）に罹患し、下肢の機能を喪失した。1975年に一家は台湾に移民として移住し、Vincent は、中学校時代を障害者施設で送った。高校を卒業した後は新聞社とラジオ放送の仕事に従事し、自立した生活を送っている。25歳から29歳の間、女性との交際を経験し、その後、同性に性的欲望をもつことを自認した<sup>2</sup>。1999年に Vincent はパートナーの Great と出会い、現在まで一緒に生活している。Vincent は台湾の同志運動（性的マイノリティ運動）の初期からかかわっており、2008年に障害のある性的少数者の団体である「残酷児（Disabled + Queer）」<sup>3</sup>を創設した。その後、障害者に対して性的支援を提供するボランティア団体である「手天使（Hand Angel）」のメンバーとしても活動している。本稿では、2000年前後から2010年ごろに行われた家族へのカミングアウトの過程について分析する。

2019年に同性婚の合法化された台湾では、同志運動が30年以上にわたって続いていた（鈴木, 2022）。2000年代の台湾には性的少数者への法制度への包摂が

<sup>1</sup> 「Vincent」はコミュニティで、活動の現場で使っている名前であり、ご本人の掲載許可を得ている。

<sup>2</sup> Vincentの肢体障害者としてセクシュアリティの探求と構築過程、または社会的な差別経験と活動について、欧陽（2021）に詳しい。本稿では家族関係の構築に焦点を当る。

<sup>3</sup> 「残酷児」という活動団体について欧陽（2023）に詳しい。



進んでいることが見られる（福永, 2017）。しかし、当時の調査によれば、同志が抱える不安や悩みなどストレスの原因として、「家族の理解を得られないことへの心配」（79%）、「社会的な婚姻に対する期待」（68%）が挙げられている（簡, 2012）。この面において、先行研究で述べた「家」「和」「孝」という華人文化が色濃く残っていることが示唆されている。ただし、政治的な状況の変化によって、同志が自らの権利を主張しやすくなり、Vincent自身も障害者の「性的権利」を訴え、「残酷児」というアイデンティティを開示する戦略で運動に参加している。こうした実践は、健常者中心主義と異性愛規範に「抵抗」するカミングアウトの実践とみることができる。一方、家族とのかかわりでは「抵抗」とは異なる実践を行ってきた。以下では、Vincentのライフ・ヒストリー調査の結果を検討していきたい。

## 4 考察

### 4-1 障害と「孝」の義務

Vincentにとって、自身が病気／障害を抱えていることは家族関係に大きな影響を与えるものである。インタビューのなかで、Vincentは子供の頃から病気のために母に苦勞をかけてきたというエピソードをよく語った。

母にはとても感謝しているよ。私は生まれてすぐに熱と発作が出て、手足が完全に麻痺しちゃって、8歳になるまで、母は医者となつとつとこころはどこにでも私を連れて行ってくれた。そのおかげで脚が少しだけ動かせる……そうであれば今もベッドで寝たきりだよ。お金を稼いで、母にいい暮らしをさせて、お返しすることはできないけれど、恩は感じているんだ。私は観音菩薩に誓いを立てている。人生でたくさんの善行を積みまなきゃって、お恵みはすべて、私じゃなく母に与えてくださいって。それが私にできる唯一の恩返しだ。

障害のある息子のケアは、主に母親が行ってきた。Vincentは「家族の負担にならないように」施設で過ごし、社会に出て自立した生活をしていた。父親が定年退職した後、両親はVincentにより良い社会福祉、特に障害者の社会福祉

を受けさせたいと考え、家族でアメリカに移住することを決めた。しかし当時、Vincentは彼氏であるGreatと離れたくなかったため、そのまま台湾に残った。

私はアメリカに行かなかった。その頃は付き合ってたまだ2年目で、やっとできた彼氏だし、彼と一緒に残るか、母とアメリカに行くか、すごく悩んだよ。〔施設に入ったため〕母と過ごした時間が少なかったものだから、私にとって家族はとても大切なんだ。でも、私って利己的なんだよ。Greatと残ることに決めた。母は「私と一緒にいかないの！」ってカンカン。私は台湾に住みたいんだよって言い訳をしたけど、彼氏がいることは言えなかったな。

Vincentは身体が不自由であるため、いつもそばに手伝う男性がいることが普通であると周囲から認識されていた。そのため、家族はVincentに同性パートナーがいることにまったく気づいておらず、Greatとの関係についても疑っていなかった。したがって、Vincentにとって、自分の性的指向を隠したまま、すなわち家族にカムアウトせずに、Greatと一緒に暮らすことが可能であったと考えられる。Vincentは、次のように述べた。

障害をもつことが、私と家族にとって大きな助けになった。私が小さいころから、母は、足の不自由な息子の人生は辛くて最悪なものになるだろうって考えてたんだ……だから母は私に何も期待していなかった。ただ、この先ずっと私の世話ができる人が現れることを望んでいた。「世話をしてくれる人がいたらいい！」って。母はそれ以外に何も望まなかった。わかった、それじゃあ、「世話をしてくれる」人を見つけてみせるよって。心のなかでそう考えた。母は女性を考えていたはずだけど、私は男性を考えていた。世話をするのは同じ。性別が異なるだけ。私はずっとそっちだった。恋人を探す努力だなんて願ったり叶ったり。しかもそれで、母に安心してもらえるんだから。そして私は彼と一緒にいられる。世話をしてもらう必要はないけど、私の両親からしてみれば、彼は私の世話係。

Vincentによれば、障害があったため、結婚して子供を持つことや年老いた親のケアをすることは両親から期待されていなかった。華人文化には「不孝有三無後為大」という価値規範がある。この伝統的規範における不孝な行為とは、祖先を祀らないこと、親を養わないこと、子孫を残さず代を絶やすことの3つを指す。そのなかで、子孫を残さないことが一番の不孝であるとされている。Vincentが「お恵みはすべて、私じゃなく、母に与えてくださいって。それが私にできる唯一の恩返しだ」と語るのは、自身が「不孝」であるという価値観を内面化していることによって出てきた表現と言えるだろう。しかし、Vincentは、「障害をもつことが、私と家族にとって大きな助けになった」といい、障害をもつからこそ、「孝」の義務を免除されたとも語っている。つまり、「孝」の価値規範の最高目標である「子孫繁栄」(斎藤, 2001)は、多くの華人同志にとって同性間の欲望と対立してきたが、Vincentの場合はその対立が生じなかったのである。「世話をしてくれる人がいたらいい」という家族の思いは、生殖と結びつけられる異性愛的な形態ではない関係性、つまり、生殖と結びつかない多様な関係性に対する受容の可能性を示唆していたのだ。

#### 4-2 カミングホームの過程

上述した通り、Vincentはそもそも「孝」に代表される異性愛的な家族規範から逸脱しているため、結婚し子供を産むといったライフスタイルは期待されていなかった。そのため、家族は同性愛も受容しやすい流れがあるように考えられるが、Vincentはそう簡単な話にはならないと指摘した。

私は、漸進的な方法を用いたんだ。何の前触れもなく「彼は私の彼氏です」って言うことで、みんなをびっくりさせ、傷つけなくなかったんだ。私たちはお互いに傷つけあうことを恐れていたんだ。

彼が「恐れていた」のは2つの点である。1つは、同性愛者であるとの表明が、家族に大きな衝撃や混乱をもたらすことである。これは、カムアウトされた親は同性愛に対する否定的な認識を子供に抱き、子供が知らない他人になったようなショックを受け、また子育てにおける強い罪悪感と失敗の感情に襲われる

(三部, 2014, p.16) ことと同義であろう。もう1つは、家族が自分のセクシュアリティを受け入れずに家から追い出されたり、または同性の恋人と別れさせられたり、暴力を振るわれたりすることである。このような不幸な出来事避けるため、Vincentが採った「漸進的な方法」について彼は次のように語った。

アメリカの両親が台湾の家に帰ってくると、いつも Great を一緒に連れてゆき、家族と食事をした。彼が誰で、どういう存在なのかを両親に説明することはなかったものの、すでにこのときから、私は土台づくりをしていたんだ。まず、Great がとてもいいやつで、私には大切な存在だということを家族に知ってもらう。そして、その時がきたら、彼が私の彼氏であること、私のパートナーであることを伝えるというものだ。

2004年に父の70歳の誕生日を祝うため、Greatとアメリカに行った。そのとき私は、私と彼との関係を母は知らないものとばかり思っていたんだけど、実は知っていた。ある時、弟と妹に向かって、母が「もし兄さん [Vincent] が死んでも、遺産はあなたたちのものにならないのよ。全部、Greatのところにいくの」と言った。もう、びっくり。母は気づいていたんだね。小学校も卒業していない人だったけど、母は母なりに私を理解していたんだな。母はそれだけを口にして、もう何も言わなかった。超感動。弟も Great に話しかけたんだ。「私らは兄さんと仲良しだけど、私らにできるのは、君が兄さんにしてくれたことの半分ぐらいだって気づいたよ」って……

Greatと行った海外旅行の写真を何度か家族に見せたことがあって。そこには車いすを押してくれる彼も映っていた。彼と出会えて幸せだと思う。[家族の] みんなも感動してくれてさ。でも同性愛については、心から受け入れることはできないと思う、特に両親は。だけど、彼が私にしてくれていることは、見ているから。

そういうことがあって、Greatと私はふたりで家を買ったんだ。私は母にふたりで家を買ったことは伝えたんだけど、それがなぜかまではいわないでおいた。母は少しずつ、理解してくれるはず。息子がなんとなく男と一緒にいるだけで、そこに特別な関係がないなら、一緒に家を買うということにはならないだろう。

VincentはGreatと恋人同士であると家族に伝えなかったことを明らかにした。すなわち、Vincentは自分のセクシュアリティやパートナーとの関係をカムアウトしていなかった。彼は、家族との食事会や重要な日にパートナーを連れて家に帰ることを通して、パートナーと親とが良い関係を築くのを企図した。また、自分のことを大事にしてくれるパートナーについて、その人柄に加え、世話をしてくれる人として認識させることで、家族の信頼と安心を勝ち取った。「一緒に家を買う」というのは、伝統的な中国文化に影響されている社会では異性愛カップルが行うことであり、共有財産をもつことは別れがたい関係性を築いていることを意味する行為である。これらを通してVincentはGreatとの関係について、家族との間に「暗黙の了解」の土台を作った。最終的に、家族は同性パートナーの存在を暗黙的に受け入れた。このような、パートナーとの親密な関係をはっきり明言せず、曖昧にしたまま受け入れさせていく、Vincentが「漸進的」と呼んだ段階的な営みは、まさに「カミングホーム・モデル」の実践であると言えよう。それは既存の家族制度に対抗せず、家族関係の「和」を維持しながらも、非規範的なセクシュアリティの空間を異性愛的な家族制度のなかに開くものであった。

#### 4-3 「クローゼットを開けてもらう」

以上の語りから、一見するとVincentはいわばクローゼットにいるまま、すなわち同性愛であることを明確に開示しないまま、家族とパートナーの間に良い関係を構築してきたように見える。しかしながら、2005年に父親が急逝したことでVincentは「父に私の人生で最も重要なことを伝えていなかった、人生で取り返しのつかない後悔を感じた」といい、クローゼットから出ることを考え始めた。葬儀の後、Vincentは母親と次のような話をした。

母にこう言ったの。「ごめんなさい、お母さんに孫を抱かせてあげること  
はできないかも。お母さんが望むなら、養子をもらうつもりだよ」って。

すると、母はそんなのだめよって言うんだ。「6人の子供を育て上げたのよ。子育ての大変さは知っているわ。しなくていいのよ」って。母は平然と  
そう口にする、少し考えた後、ぽっと顔を向けて、はじめではっきり私に  
聞いたんだ。「あなたが本当に言いたいのは、あなたが同性愛だってことで

しょう？」って。

母の口から「同性愛」という単語がでたのははじめてだった。私は、「ごめんなさい、そうです」と言ったんだ。母は「知っていたよ。ともかく、あなたが幸せであればいいよ」と言ってくれたんだ。

Vincentはまた、そのときに母親に対して言った「ごめんなさい」の意図も説明した。

「ごめんなさい」と言ったときに、とても悲しかった。でも、この悲しみの原因は私のせいではないとずっと思っていた。この悲しみを背負い込むのは、母と私ではない、この社会全体だって。

Vincentは自ら自分のセクシュアリティを母親に表明する際にも、直接的に「同性愛」であるとは言っていない。そのかわりに、「孫を抱かせてあげることができない」や「養子をもろう」という暗示的な表現を用いていた。母親はその言葉の意味を悟り、自らの口でVincentが「同性愛だ」と明確に言葉にした。「クローゼットを〔母あるいは他者から〕開けてもらおう」とVincentが自身のサイトで述べている<sup>4</sup>のは、華人文化の「含蓄」というはっきり伝えず婉曲的表現を行うコミュニケーション・スタイル (Liu & Ding, 2005) を通して、自分のセクシュアリティと家族とを調整してきた実践の一つの結果として考えられる。すなわち、家族との間に暗黙の理解の土台が築かれ、人生の重要な契機を経験した本人にクローゼットから出たいという意思が芽生えたとき、自ら自分のセクシュアリティを明示せずとも、クローゼットから出るよう導かれることもあるのである。

また「この悲しみを背負い込むのは、母と私ではない、この社会全体だ」という言明は、自分たちを苦しめているものが、社会の異性愛規範であるという指摘と糾弾である。ただし、この説明には、家族との交渉のなかで、Vincentが他者に対する想像力を働かせる姿勢が示されている。Vincentは非異性愛である自身

<sup>4</sup> Vincent. (2021). 「媽媽打開殘障兒子的櫃子 (母は障害者の息子のクローゼットを開けた)」。 Retrieved July 22, 2021, from <https://www.facebook.com/notes/3366534813383476>

と異性愛の親の両方が、社会の異性愛規範から抑圧を受けていることを理解し、親の大変さや認識の限界もある程度想像していた。Vincentは前述したように、社会的には「残酷児」や「手天使」の活動を通じてマイノリティの権利運動を展開している。だが家族関係においては、セクシュアル・アイデンティティの承認を求めるよりも、家族が同性パートナーとの親密関係を受け入れる余地の構築を優先していると言える。

#### 4-4 カミングアウト後と関係修復

本節ではVincentとパートナーの家族との関係の変化、日常における「カミングアウト・モデル」の実践とカミングアウト後の関係構築について考察する。

パートナーのGreatは一人っ子であり、公務員の仕事に就いている。台湾の伝統的な価値観では、一人っ子の男性は家系を引き継ぐ強い責任があるとされる。また職場では結婚の有無が出世に影響を与える。そして、Greatの母はキリスト教信徒であった。そのような背景から、Greatの母が息子とVincentとの関係を認めるのに困難であったことは想像に難くない。Vincentは、Greatの父の誕生日会で、はじめてGreatの親に会った。そのとき、Greatは、Vincentに事前の説明もなく「Vincentは私の彼氏だ」と紹介した。突然カムアウトされたGreatの親はその事実を受け止めることができず、VincentとGreatの親との緊張関係は3年間続いた。しかし3年後にある変化の兆しが見えた。Greatはその年の正月を実家に帰らずVincentと一緒に過ごすことに決めた。すると、Greatの母から二人で一緒に家に来なさいと、正月の食事に招かれた。その後、緊張関係は改善されたという。Vincentはこの変化について以下のように説明した。

Greatのお母さんが私のことを受け止められたのは、自分を騙しているからなんだと思う。自分の息子は良いことをしているんだって。良いことというのは、障害者をケアしているから。そう考えることで、彼女は楽になり、私たちの関係を受け入れやすくなったんだ。私にとってはそれで良いんだけど。

Greatの告白は、異性愛的な家族規範に直接抵抗し、伝統的な価値観を拒否す



る姿勢を示すものとなった。すなわち、Greatは「カミングアウト・モデル」に従った実践を行った。同時に、Vincentもアウトイングされた立場となり、双方とも受動的な立場に置かれてしまった。息子が同性愛者であると突然に知らされたGreatの親はショックを受け、二人の関係を認めることができなかった。こうした事態は、ほかの調査においても狭義の「カミングアウトの失敗」とされている（UNDP, 2016）。

しかしながら、三部が「カムアウトは、一度だけでは終わらない」（三部, 2014, p.93）と指摘するように、とりわけカミングアウト後の家族とのかかわり方においては、カムアウトした者とされた者の双方の関係性の構築が問題となる。Vincentは、当初、Greatの母はクリスチャンであり、その教義のため息子の同性間の関係性を認めることは非常に難しいと認識していた。この厳しい状況に対する突破口になったのは障害者であるとVincentは解釈した。Vincentの語りによると、自分は肢体不自由なので、介助する人のケアが必要であることは一般的に想定されている。弱い立場に置かれた障害者をケアする行為は、Greatの母にとって、神によって祝福される素晴らしい行動であった。そして、障害者は無性愛だという多くの人々の偏見を利用したというようにVincentは考えている。Greatの母が「罪」と見なす同性間の性行為が二人には不可能であると彼女に思わせるために、Vincentは自ら性的主体ではないことをアピールした。最終的に、Greatの母は息子とVincentとの暮らしを受け入れたという結果になったと、述べた。すなわち、「障害者」であることが、カミングアウト後の家族との関係修復を可能にするファクターとして働いたのである。Vincentの戦略は、健常者中心の社会規範が生んだ障害者（無性愛、無能力）の偏見を利用して、対話が可能な空間を作り出すものであったと言える。これも、家族規範とセクシュアリティの両方を並行させる「カミングウィズ・モデル」であると言えよう。

## 5 結論

本稿では、肢体障害をもつ男性同性愛者Vincentの語りをもとに、カミングアウトをめぐる障害、セクシュアリティ、家族との関係の変化、および関係を再構築するプロセスを分析した。Vincentの事例から示唆されたのは、次の2点である。

第一に、カミングアウト・ナラティブは可変的、相互的であり、カミングアウトの過程においては、単一のモデルの遂行・維持だけでなく、違うモデルへの切り替えや複数のモデルの統合もなされることである。

Vincentは自分の家族に対して、「漸進的な方法」を通してセクシュアリティを明確な形で表明せず、家族の「和」を維持しつつ、同性パートナーとの関係への承認を得た。その行動の戦略の特徴を3つにまとめるなら、次のように言えるだろう。(1) カミングアウトによる親子関係の緊張を回避するため、ケア的側面でのパートナーの必要性や人柄をアピールする（そうして家族と良い関係を築いていく）。(2) 重要な日にはパートナーと一緒に実家に帰り、食事をすることで、身内とよそ者の区別を解除する。(3) 友情以上の関係を言外に、それとなく、いわばセクシュアルと受け取られない方法で表現することで、家族が暗黙の了解を家族のなかに浸透させる。Vincentは自らの生活を既存の家族規範とうまく融合させたが（「カミングホーム・モデル」の実践）、父親の急死によって、本当の自分を伝えたい、カムアウトしたいと思い始めた。この変化からもわかるように、カミングアウト・ナラティブは固定的なものではなく、人生の変化に合わせて、その方法も変わっていくのである。

他方で、パートナーのGreatの家族への対応は、「カミングホーム・モデル」と呼ぶ戦略とは全く異なるものであった。Greatは突然Vincentと同性カップルであることを親に告白した。これは、規範を拒否する姿勢を示す「カミングアウト・モデル」に従った実践であった。他方、Vincentは本来自分の家族に対して実践してきた漸進的な方法で、パートナーの親に開示していくことを考えており、いきなり自分たちの恋愛関係を明示することは考えていなかった。しかし、パートナーによるカムアウトで自身のセクシュアリティをアウトイングされてしまう。その際にVincentはGreatの家族との緊張関係を緩和させる試みもした。二人の関係に反対を示す敬虔なキリスト教信者であるGreatの母は、障害者へのケアが神から祝福される行いであると信じていた。また障害者は無性愛であるという偏見があった。そこで、Vincentは同性愛者であることよりも、障害者であることを強調して、互いの緊張関係を緩和させていった。第2節で述べたように「カミングウィズ・モデル」を「カミングアウト・モデル」「カミングホーム・モデル」以外のものとしたが、その代表的な例として挙げていたのが「形

婚」である。ここから窺えるのは「カミングウイズ・モデル」の特徴には、特定の社会規範と非異性愛的な欲望の両立のために、別の既存の社会規範や、偏見を含む社会的通念を利用するという側面が共通してあることである。本稿の事例は、「カミングアウト・モデル」の実践が（失敗）した後に、障害者の一般化されたイメージや偏見を利用しながら「カミングウイズ・モデル」に移行したケースである。

Vincentの事例は、長期間交渉することによって、異性愛的であった家族空間に変容が生じことを示している。この過程のなかで、Vincentは自分からアクションをする一方で、家族側からの反応によってどのように振る舞うのかを判断していた。家族もVincentとコミュニケーションをとりながら、考えや態度を変化させていた。Vincentは時に能動的で、時に受動的でもあり、それは家族の側も同じである。すなわち、カミングアウトの行為は複数の主体の相互作用によって構成されているのである。

第二に、「カミングアウト」をめぐる交渉過程において、Vincentがうまく家族と交渉できたのは、彼が障害者であったという点が大きく作用していることである。

障害のある同性愛者は、二重のマイノリティ性をもつことでより苦しむというのが従来の理解であり、実際、そうした事例は広く見られる。それゆえネガティブな複数の要素が重なった「複合的不利益」について論じた研究は多いが、本稿の事例は、肢体障害が必ずしもマイナスに働くとは限らないことを示唆している。Vincentが「障害をもつことが、私と家族にとって大きな助けになった」と述べたように、華人文化の儒教的な「孝」の価値観と対立する非異性愛的な欲望を両立させるためには、障害者であることが好都合であった。Vincentは自分から家族を騙そうとはしていないが、障害者という立場を戦略的に利用していた。生殖と結びつく異性愛的な親密関係というよりも、ケアし合う関係性としてパートナーとの関係を理解してもらうよう、互いの家族を誘導したのである。またパートナーの家族に対しては、障害者は性と関係ない、ケアされるだけの存在であるといった、相手のミスリードされた認識を利用して、対話する空間を作り出した。

Vincentはカミングアウトをめぐる交渉過程のなかで、異性愛者である家族も

社会の異性愛規範または健常者規範から抑圧を受けていることを理解し、相手の大変さや認識の限界もある程度想像していた。彼は、個人の力だけでは短期的に変えられない現実に直面した場面には、「障害者である」というマイノリティ性を戦略的に活用している。この戦略は、自らに敵対的な社会的規範を、家族関係の再構築の目指す資源として巧みに活用し、結果的に脱異性愛規範的な家族関係の形成の可能性を切り開くものとなった。他方で、Vincentは積極的に社会運動に参加し、「アウト」によって障害者の性の権利を主張し、健常者中心の同志コミュニティを批判している。彼は、様々な状況に応じてモデルを使い分け、抑圧を低減するために多様なアプローチを模索しているといえる。

本稿では、特定のマイノリティ性を原因として抱えていた困難な状況は、ときに別のマイノリティ性を戦略的に使うことで打開されることもあることを示した。ただし、そうした戦略が、障害をもつ華人同志が置かれた社会規範や構造的な制約に応じて選択されている点にも十分に注意を払う必要があるだろう。特定のマイノリティ性を戦略として生かすこと、それに即して多様なモデルを使い分けていくこと自体が、華人の「家」「和」「孝」の文化、あるいは健常者中心の構造に規定されているものだからである。いずれにしても、多様な「カミングアウト」のあり方を、特定のモデルへと回収せず、個々の当事者が抱える複雑さとそれに伴う家族関係の変化に照らして検討していくことが重要である。その際には、複数のマイノリティ性が必ずしも複合的不利益だけに帰結するわけではなく、個人をとりまく差別状況の改善にポジティブに作用することもありうること、かつそうしたポジティブな作用が各社会の規範や構造的制約に規定されたものであり、逆説的に既存の規範や制約を維持・継続することにもなりうることに目を配る必要がある。今後は、差別状況を生み出す社会構造に対する批判と交差性との関係をより多くの華人同志の事例から解きほぐしていきたい。

## Acknowledgement

本稿はJSPS科研費（JP20J21415）による成果の一部であり、立命館大学生存学研究所2018年度若手研究者研究力強化型「国際的研究活動」、ならび松下幸之助記念志財団2023年度研究助成を受けたものである。

## References

- Altman, Dennis. (2010). 『ゲイ・アイデンティティ——抑圧と解放』(岡島克樹・河口和也・風間孝訳). 東京: 岩波書店. (Original work published 1993).
- Chou, Wah-Shan. (2000). *Tongzhi: Politics of same-sex eroticism in Chinese societies*. New York and London: Routledge.
- Chou, Wah-Shan. (2001). Homosexuality and the Cultural Politics of Tongzhi in Chinese Societies. *Journal of Homosexuality*, 40(3-4), 27-46.
- 福永玄弥. (2017). 『LGBTフレンドリーな台湾』の誕生. 『世界』, 898, 89-95.
- 簡至潔. (2012). 『台湾同志壓力處境問卷』調査結果初步分析. TAPCPR. Retrieved July 22, 2021, from <http://tapcpr.wordpress.com/2012/04/17/>
- Huang, Shuzhen., & Brouwer, D. C. (2018). Coming out, coming home, coming with: Models of queer sexuality in contemporary China. *Journal of International and Intercultural Communication*, 11(2), 97-116.
- 河口和也. (2003). 『クィア・スタディーズ』. 東京: 岩波書店.
- 倉本智明編. (2005). 『セクシュアリティの障害学』. 東京: 明石書店.
- Kong, Travis. (2011). *Chinese Male Homosexualities 華人男同志跨地域研究*. New York: Routledge.
- 李佩雯. (2018). 「當『他們』也是『我們』——已出櫃同志與原生家庭之跨群體溝通關係維繫研究」. 『傳播研究與實踐』, 8(1), 65-101.
- Leonard, W., & Mann, R. (2018). *The everyday experience of lesbian, gay, bisexual, transgender and intersex (LGBTI) people living with disability, No.111 GLHV@ARCSHS*. Melbourne: La Trobe University.
- Liu, Jen Peng & Ding, Naifei. (2005). Reticent Poetics, Queer Politics. *Inter-Asia Cultural Studies*, 6(1): pp.30-55.
- 三須祐介. (2018). 「林懷民『逝者』論——『同志文学史』の可能性と不可能性をめぐって」. 『立命館法学別冊』, 6, 603-626.
- Molly, D., Knight, T., & Woodfield, K. (2003). Diversity in disability: Exploring the interactions between disability, ethnicity, age, gender and sexuality. *Research Report No.188*, Department for Work and Pensions, Leeds.
- 元山琴葉. (2014). 『カミングアウトされた家族』から〈非異性愛者をもつ家族〉になることとは——『家族崩壊』に対応する母親役割に着目して. 『家族社会学研究』, 26, 114-126.
- Motoyama, Kotona. (2015). Experiences of Coming Out in Japan: Negotiating 'Perceived. Homophobia'. *Asia-Pacific Social Science Review*, 15(2), 75-92.
- 欧陽珊珊. (2021). 「障害とセクシュアリティの交差についての考察——台湾の肢体障害/男性同性愛者の経験から」. 『コア・エシックス』, 17, 51-63.
- 欧陽珊珊. (2023). 「残酷児——台湾における障害のある性的少数者の実践」 菊地夏野・堀江有里・飯野由里子編『クィア・スタディーズをひらく3』. (pp.108-135). 京都: 晃洋書房.
- Ryoji & 砂川秀樹. (2007). 『カミングアウト・レターズ』. 東京: 太郎次郎社エディタス.
- 斎藤光編. (2001). 『東アジアの性を考える』. 京都: 京都精華大学創造研究所.
- 三部倫子. (2014). 『カムアウトする親子』. 東京: 御茶の水書房.
- Shakespeare, Tom. (1999). Coming Out and Coming Home. *International Journal of Sexuality*

- and Gender Studies*, 4, 39-51.
- Shakespeare, Tom., Gillespie-Sells, Kath., & Davies, Dominic. (1996). *The Sexual Politics of Disability: untold desires*. London and New York: Cassell.
- 鈴木賢. (2022). 『台湾同性婚法の誕生』. 東京: 日本評論社.
- Tan, Chris K. (2011). Go Home, Gay Boy! Or, Why Do Singaporean Gay Men Prefer to 'Go Home' and Not 'Come Out'?. *Journal of Homosexuality*, 58, 865-882.
- UNDP. (2016). *Being LGBTI in China: A National Survey on Social Attitudes towards Sexual Orientation, Gender Identity and Gender Expression*. United Nations Development Programme.

Abstract

## **Negotiation Process of ‘Coming Out’ with Skilled / Flexible Acceptance: A Case Study of a Gay Man with Physical Disabilities**

OUYANG Shanshan

This article clarifies how a status of disabled minority affects a process in which gay people inform their parents of their sexualities. Most research on this issue has often presumed that individuals belonging to both sexuality and disability minorities would experience compounded disadvantages, leading multiple difficulties in coming out. As a case study of such coming out processes, I apply three coming out models remarkably discussed in the context of Queer Sinophone Studies: coming-out model, coming-home model, and coming-with model. Based on these models, this study focuses on a Taiwan-based gay man with physical disabilities faced through the experience of coming out to his parents. The result indicates that the gay man’s status of combined minorities with sexuality and disabilities, which led to “compounded disadvantages”, did not act as a negative factor in his relationship with his family. In conclusion, those with combined minorities flexibly apply their multiple minorities in order to improve the family relationship in the process of coming out, in which they switch or combine some among the three models depending on the situation. It is crucial not to categorize them strictly into a particular model. Instead, examining these experiences within the broader context of the complexities faced by individual parties and the subsequent transformations in family relationships provides a more nuanced understanding.

### **Keywords:**

people with disabilities, queer Sinophone, coming out, family relationship, LGBT